［参考事項］
新技術名： トマト側枝２本仕立ての栽培特性（平成28年）

研究機関名　農業試験場　野菜・花き部　野菜担当
担　当　者　武田悟・篠田光江　他１名

［要約］
育苗株数が半分で済むトマト側枝２本仕立ては、主枝１本仕立てと比較して、第１花房開花が約半月遅れ、収穫段数が１段少なくなる。ただし商品果率や果実品質は同等である。

［普及対象範囲］
県内全域

［ねらい］
本県のトマト生産は土耕での夏秋栽培が主体である。育苗コスト低減や、夏期の草勢管理のため、主枝と側枝を用いた２本仕立て栽培が従来から行われている。ただし枝間に生育差が生じ、誘引や整枝作業が繁雑になる欠点がある。
そこで、育苗株数が半分で済み、省力的な側枝２本仕立て（山形、平成26年度）での、本県夏秋作型における栽培特性を明らかにする。

［技術の内容・特徴］
１　「桃太郎８」と「りんか409」を、主枝１本仕立てと、側枝２本仕立てで、面積当たり枝数が同等となるように栽培すると、両品種とも側枝２本仕立ての開花が約半月遅く、主枝１本仕立てが12段まで収穫できるのに対し、側枝２本仕立ては11段までと１段少なくなる（図１、図２）。

２　果房下茎径は、「桃太郎８」では仕立て法による差は見られないが、「りんか409」では側枝２本仕立てで７月中～下旬にやや細くなる。ただし８月中旬以降は同等となり（図１、図２）、10月中旬の収穫終了時まで草勢を維持している。

３　可販果（障害果以外の収穫果）の月別収量は、両品種とも開花が遅れた側枝２本仕立てが７月は少ないが、以降は両仕立て法とも同等である（図３）。

４　商品果（Ａ、Ｂ品）の規格別収量の割合は、両品種ともほぼ同等（図４）で、両品種、仕立て法とも商品果収量は夏秋作型の目標収量 1,200 kg/a を越える（表１）。

５　両品種、両仕立て法とも、商品果率は８割程度で、平均果重にも仕立て法による差は見られず、果実品質に差はない（表１）。

［成果の活用上の留意点］
１　当試験は３月22日に播種し、畝間220cm、株間45cm（側枝２本仕立ては90cm）、条間50cm、２条植え（202本/a）の栽植様式で、５月17日に定植した。

２　側枝２本仕立ては主枝２節上で摘心し、第１節側枝、第２節側枝を利用した。

３　施肥(kg/a)は基肥に窒素、リン酸、カリ各1.4、追肥に窒素、カリ各0.5を施用した。

４　誘引法はつり下げ誘引とし、両仕立て法とも展開葉数17～18枚以下は定期的に摘葉し、葉面積を調整した。

５　着果数は１段目を３果とし、２段目以降は４果を目標に摘果した。

［具体的なデータ等］

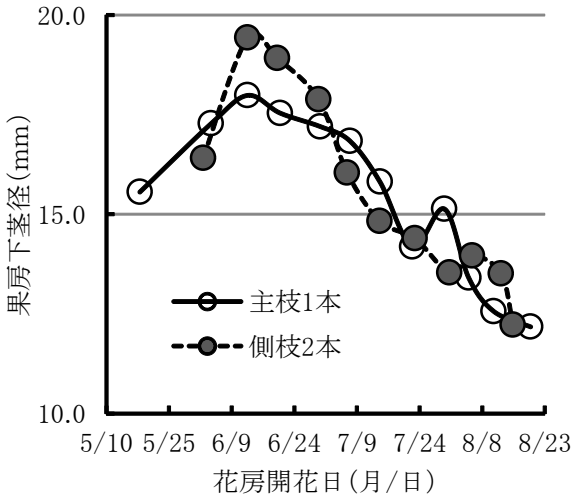

図1 「桃太郎8」の花房開花日と果房下茎径

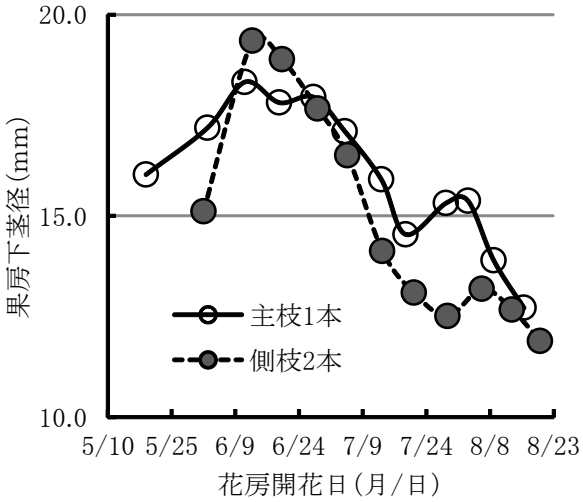

図2 「りんか409」の花房開花日と果房下茎径

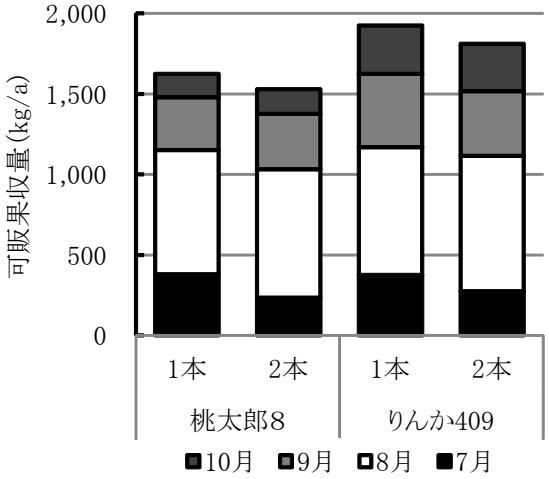

図3 品種、仕立て法と可販果収量

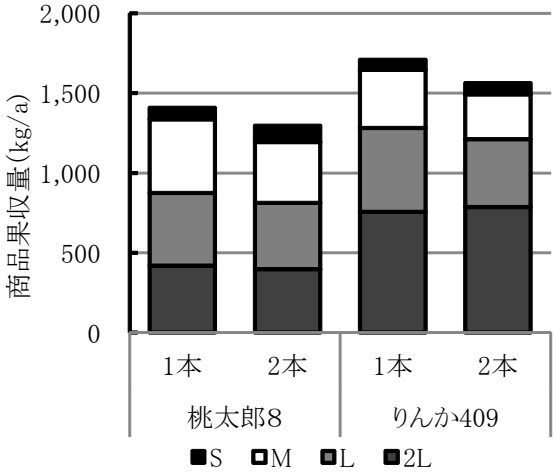

図4 品種、仕立て法と規格別商品果収量

表1 品種と仕立て法による果実収量、品質

品種	仕立て法	全収量 (kg/a)	可販果[1)](kg/a)				障害果[2)] (kg/a)	商品果[3)] (kg/a)		
			A品	B品	C品	合計		収量	割合	果重(g)
桃太郎8	主枝1本	1,750	787	621	217	1,625	128	1,408	0.80	211
	側枝2本	1,645	746	549	234	1,529	116	1,295	0.79	215
りんか409	主枝1本	2,000	1,078	632	216	1,925	75	1,710	0.85	242
	側枝2本	1,933	908	654	251	1,812	121	1,562	0.81	238

注[1)]A品;外観・形状に問題なし、B品;軽微な問題あり、C品;果肉に問題なし(加工用)
注[2)]窓あき果、チャック果、裂果、小玉果(80g未満)、変形果、尻腐れ果など
注[3)]A品とB品の合計

［発表論文等］
なし